



大河ドラマ「鎌倉殿の13人」 物語は激動の中盤へ！注目のキャストも次々に登場！

大河ドラマ「鎌倉殿の13人」。源頼朝(大泉洋)は主人公・北条義時(小栗旬)らとともに挙兵した当初からの目標だった「打倒・平家」を果たしましたが、鎌倉には不穏な空気が。5月15日の放送では頼朝と、その天下取りに貢献した弟・義経(菅田将暉)が完全に決裂してしまいました。今後の見どころや、激動の中盤を彩る登場人物をふん装写真とともにご紹介します。

5月22日(日)「帰ってきた義経」

京を離れ、里(三浦透子)とともに奥州へ逃れた源義経。しかし、温かく迎え入れてくれた奥州の覇者・藤原秀衡(田中泯)が程なく死去。これを知った義時は、状況を探るため平泉行きを志願するが、義経の才を恐れる源頼朝は、藤原国衡(平山祐介)・泰衡(山本浩司)兄弟の仲の悪さにつけ込み義経を討つように冷たく命じる。八重(新垣結衣)に見送られ、平泉へと発つ義時。

一方、捕らわれた静御前(石橋静河)は鎌倉で…



そして、物語は、いよいよ中盤へ…

平家を倒した頼朝は、奥州をも征服し全国支配を完成させる。頼朝は満を持して義時ら御家人とともに大軍を率いて上洛し、ついに後白河法皇(西田敏行)との対面を果たす。しかし、三浦義澄(佐藤B作)、岡崎義実(たかお鷹)など一部の御家人の間には利益のない上洛への不満も広がっていた。

建久3年(1192年)には頼朝が武士の頂点・征夷大將軍となり、政子(小池栄子)は第四子、のちの三代將軍・実朝(柿澤勇人)を出産するなど、権勢の絶頂を迎えたかに見えたが、足下で御家人の不満はくすぶり続けていた。有頂天の頼朝は嫡男、のちの二代將軍・頼家(金子大地)の披露目の場として御家人を集めて“富士の巻狩り”を行うが、そこで起きたある事件を境に、頼朝の弟・範頼(迫田孝也)や娘の大姫(南沙良)、そして頼朝その人の運命も狂いはじめる…

そんな中、妻・りく(宮沢りえ)にたきつけられた北条時政(坂東彌十郎)と、権力拡大を狙う比企能員(佐藤二朗)が対立し、梶原景時(中村獅童)、八田知家(市原隼人)ら宿老を巻き込んだ権力闘争に発展していく。

義時は北条家の中核となり、家を率いる立場として奔走する。成長した弟・時房(瀬戸康史)や長男の泰時(坂口健太郎)、比奈(堀田真由)ら新しい北条家メンバーも加わり、激動と混沌に立ち向かう中で、重大な決断を何度も迫られる。群像劇の名手・三谷幸喜さんが描き出す予測不能のエンターテインメントが、さらに加速していく。

<中盤以降に登場する人物たち>



北条泰時(坂口健太郎)
義時の最愛の息子。第三代執権にして日本史上屈指の名宰相。



北条時房(瀬戸康史)
義時の弟。末っ子ながら、やがて義時も政子も頼る大政治家に。



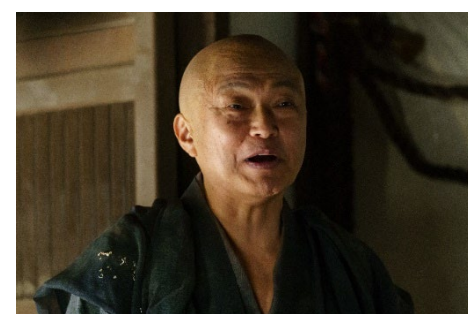
比奈(堀田真由)
義時の正室。権力闘争を繰り広げる北条と比企の間を懸命につなぐ。



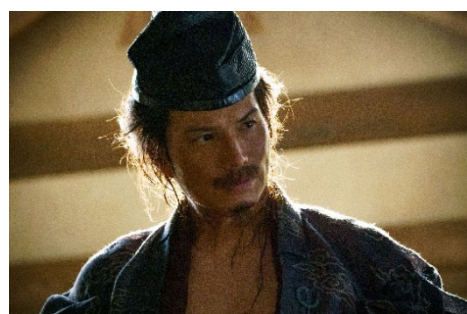
源頼家(金子大地)
頼朝の嫡男で義時の甥。肉親・北条家と争う二代将軍。



大姫(南沙良)
頼朝の愛娘で義時の姪。純朴な少女は父の野望に巻き込まれていく。



運慶(相島一之)
日本中世に輝く天才芸術家。北条家のため珠玉の仏像の数々を生み出す。



八田知家(市原隼人)
北関東を治める御家人。伊豆・相模・武蔵の勢力と一線を画す。北条の敵か味方か。



後鳥羽上皇(尾上松也)
後白河の孫で、文武に秀でた偉大なる帝王。その誇りが義時に牙をむく。